

社会体験研修で感じた図書館における学習支援の在り方

長瀬 純一郎（長野県松本蟻ヶ崎高等学校）

1. はじめに

長野県は採用10年目の県高校職員を対象としたキャリアアップ研修の一環として、他業種の仕事を1日ないしは2日体験するという研修を行っている。そこで令和5年8月9日（水）、私は信州大学附属中央図書館で研修を行わせていただいた。私自身、国語科として授業を受け持ち、司書教諭として図書館に常駐している身で、図書委員会の活動の顧問としても図書館に関わっているため、近隣であり本校からの志望者の多い信州大学の図書館業務や特徴について興味があった。

本稿では、研修を受けて感じた信州大学図書館の特徴と、それと比較した松本蟻ヶ崎高校の図書館利用の実際について述べ、これからの図書館における学習支援充実のために何ができるかを考察してみたい。

2. 信州大学図書館利用の取り組みについて

館内を案内していただいてまず感じたのは、図書館の中が明るく、開放的なことであった。平成27年にリニューアルしてバリアフリー対応や自由学習スペースの拡充がなされ、木材が多く使われた暖かみのある外観が目立つ、明るく入りやすい図書館である。研修時は夏休みでもあり共同学習スペースで勉強する学生は少なかったが、席が満席に埋まることもしばしばであるとのことだった。

信州大学附属図書館が主催する特徴的な学習支援として、学生が学生に対して行う「ピアサポ@Lib」という取り組みがある。閲覧室にそれ用のブースがあり、学習に関すること（ラーニングアドバイザー）やレポートの書き方に関すること（ライティングアドバイザー）を年の近い先輩から教えてもらえるというものである。こうした取り組みは、図書館の利用を促すとともに、教えることによって教授者の知識の定着も見られるといった「学び合い」の効果も期待できる。もちろんアドバイザーの学生には図書館の予算から賃金も支払われる。

しかしながら、実際に支援が必要な学生にこそ届いていないという点に課題があることもお聞きした。アドバイスをするにもまずは実際に図書館に足を運んでもらうことが必要で、支援が必要な層に如何にして情報を届け、図書館に足を運んでもらえるかといった点で頭を悩まされていた。SNS等を用いて情報発信をしても、学習支援が必要な層にその情報が届かないという現状があり、特にコロナ禍に端を発する利用者減という実情には苦慮されていた。

コロナ以降という点では、高校図書館との違いとして、電子書籍の利用という点で大きく進んでいると感じた。コロナ禍により社会の状況が大きく変わらざるを得なくなった時、やはり学び

の場としての図書館はいち早く対応を迫られたということでもある。松本蟻ヶ崎高校の生徒も、今は入学時に必ずタブレット端末を購入することが普通で、授業や行事等で活用する頻度も多いが、図書館の蔵書を電子書籍として読むことはまだできない。高校の現場では学校ごとに電子書籍を購入して図書館が運営してゆくことはまだ難しいが、例えば2022年から運用が始まった県の電子書籍閲覧サービス「デジとしょ信州」の利用の仕方をガイダンスするなどして高校生の読書の機会を広めることはできる。現に中信地区の小中学校ではこうした電子図書を学習に活用する事例が広がっている。高校でも、このような取り組みを推進してゆくことで、多様な図書館利用の可能性を広げられるのではないだろうか。

3. 松本蟻ヶ崎高校における図書館利用の取り組みについて

次に、松本蟻ヶ崎高校での図書館利用の実態と課題について述べてい。

今年度も含めた直近5年間の総貸出冊数は次の表の通りである。2020年度は、新型コロナに伴う緊急事態宣言のため休校期間があり、図書館の利用者が大きく減少した。特に休校期間が新学期当初だったことは、新入生に十分なガイダンスを行えなかったという点で利用の大きなブレーキになった。

表 1. 松本蟻ヶ崎高校学年別貸出冊数

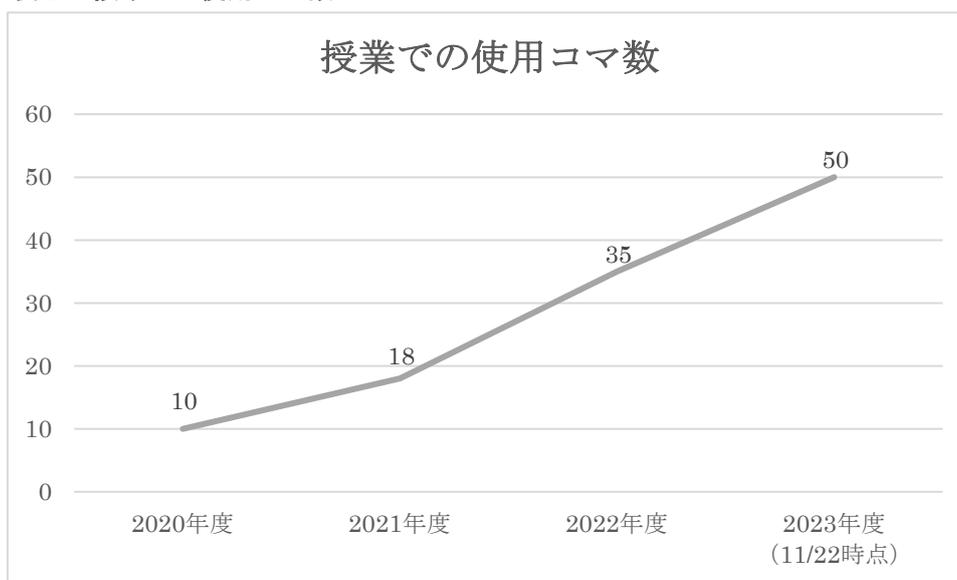


しかし、その一方で授業における図書館の利用頻度は年々増加していった。この背景には高校で2022年度から探究学習を軸とした新課程「総合的な探究の時間」がスタートしたことが挙げられる。「目の前の課題を様々な方法で調査・理解し、自分の力で考える」ことを重視したこの科

社会体験研修で感じた図書館における学習支援の在り方

目では、生徒それぞれが課題に対して主体的かつ協同的に取り組むことになる。ここにおいて、学びの中で図書館の資源を活用したり、グループで共通の課題について話し合ったりする機会を図書館で設けるといった授業が増えた。実際に今年度においては、11月の時点ですでに昨年度とほぼ同じ水準の利用者数が記録されている。

表 2. 授業での使用コマ数



こうした授業での活用事例として、探究学習の他に家庭科や保健体育といった授業でも図書館を利用することが増えた。自習やグループ学習など、図書館だからこそできることを求めて利用するというケースも多くなってきている。これらのことから、図書館に足を運ぶことで、自然な流れとして図書館の本を借りる、という利用者が増加している。学生たちは学習の一環として積極的に図書館の資源を活用し、これが貸し出し冊数の伸びに寄与している。

総括すると、2020年の新型コロナにおける図書館利用者数の減少と同時期から、図書館で授業を行うという形が徐々に増えていった。そうした新たな学習様式によって積極的な図書館の利用が促され、結果として貸し出し冊数の増加という形で表れている。今後も、常に変化する学習環境に柔軟に対応し、新しい時代の学びの担い手としての図書館という存在が期待されている。授業を図書館で行うことで、普段来館しない生徒も図書館に足を運ぶことになり、本に触れる機会が増える。図書館に足を運ぶきっかけがあれば、前述したような支援が必要な層へのアプローチの可能性も広がると言えるだろう。

また、生徒たち一人ひとりの持つタブレット端末を有効利用するためにも、電子図書の貸出サービスについても意欲的に導入に向けて検討してゆきたい。そうした取り組みは自治体単位である小中学校で先んじているため、高校図書館も長野県の学校図書館協議会（SLA）等で情報の

交流を行い、生徒の学習機会の増加に寄与したいところである。

4. 終わりに

今回、信州大学附属図書館で研修をさせていただき、現在の大学図書館の実情や学習支援の様子、それに伴う諸課題を学ばせて頂くことができた。翻って、勤務校である松本蟻ヶ崎高校の図書館活用の事例を考えたときに、これからの学びの在り方に対してどのようなアプローチができるか、多くの視座を得ることができた。

最後に、お盆休み前の多忙な時期にもかかわらず快く研修を受け容れてくださった信州大学附属図書館の皆様には、改めてこの場を借りて心から感謝申し上げます。ありがとうございました。